

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

権威の所在

――マルコ伝第1章21～34節――

1964年4月19日

小池辰雄

魂消た 御霊の権威 真理の権威 神の聖者 神の権威 神の国は到れるなり 権威ある新しい教 神が化体しているひと 伝燈 救い上げる力 安息日であるうといつてもいい 無権威 キリストの権威 その秘訣は十字架 御霊における権威

【マルコ1・21～34】（私訳）

21それから、彼らはカペナウムに行った。そしてにシナゴグ（礼拝堂）に入って教えた。22すると人々は彼の教説に瞠目した。それは彼が権威ある者のごとく彼らに説き、学者らの如くではなかったからである。23あだかもその時、彼らの礼拝堂に汚れた霊に憑かれた人間がいて、叫んで言った。24ナザレのイエスさま、私たちがあなたに一体何だというのですか。私たちをやっつけに来なさったのですか。私はあなたが誰だか知っていますよ。神の聖者です。25すると、イエスは彼を叱りつけて言った「黙れ、出よ、この人から」。26すると、汚れた霊は彼を引きつけさせ、大声で叫びながら、その人から出ていった。27人々はみな驚き論じ合って言った「これは何事だ。権威ある新しい教えだ。穢れたる霊どもにさえ彼が命じなされると、彼らは言うことをきく。」28こうして、イエスの噂はたちまち、かいわい到るところ全ガリラヤにゆきわたった。

29それから、礼拝堂を出るとすぐ彼らはヤコブとヨハネと共にシモンとアンデレとの家に入ってしまった。30ところが、シモンの外姑が熱病で寝ていたので、彼らは直ちに彼女のことをイエスに告げた。31イエスは近づいて、彼女の手を取って起こした。すると、熱が彼女から去った。そこで彼女は彼らをもてなした。

32夕暮れになり、日が沈むと人々は彼の御許に病人や悪鬼に憑かれた者をみな連れて来た。33すると、町中の人々がみな門口に集まった。34イエスはさまざまな病気に罹っている多くの病人をいやし、また多くの悪霊を逐いだした。また、悪霊どもに発言を許さなかった。彼らにはイエスが分かっていたからである。



●魂消た

²¹それから、彼らはカペナウムに行った。そして安息日あんそくにちにシナゴークシナゴーク（礼拝堂）に入って教えた。²²すると人々は彼の教説に瞠目どうもくした。それは彼が権威ある者のごとく彼らに説き、学者らの如くではなかったからである。

カペナウムというのは、ガリラヤ湖の北岸にある。今でもこのシナゴークの遺跡が残っている。非常に貴重な遺跡です。もうほとんど柱だけで、少し囲いの一部分が残っているに過ぎませんが。多少、復元したような所もあるようですけれども、確かにあの場所であることは大體間違いないようです。非常に印象的な所です。そこで親しく教えを語られた。ルカ伝4章31節以下に、

「³¹斯かくてガリラヤの町カペナウムに下りて、安息日あんそくにちごとに人を教え給えば、

³²人々その教おしえに驚きあえり。その言、権威ありたるに因よる。」（ルカ4・31～32）

とある。「安息日」は、こちらでいえば、金曜の晩から土曜の晩にかけてです。「人々その教に驚いた」と書いてある。「驚く」というのは非常に強い言葉です。「魂消たたまげ」という言葉があります。魂が消えるようにたまげてしまったわけです。よほど私は「たまげた」と訳そうかと思った。「その言、権威ありたるに因る」と書いてある。マルコ伝1章27節のところにも、

「人々はみな驚き論じあつて言った。これは何事だ。権威ある新しい教えた。」

という言葉がもういつぱん出ています。そこで、「権威の所在」と題したわけです。

今、文化的な世界においては、権威というものは——このギリシャ語の「権威」という字もいろいろな意味をもっている。この世的な意味もあるし、天的な意味もあつて、いろいろに使われている。「エクスシア」という字ですが——大体、権勢の意味の権威、また学問の権威ということが、文化的な世界における権威の所在でありましょう。その当時の旧約の聖書に明るい人たち、いわゆる教師といわれる人たちの権威というものは非常なものであったわけです。イエスの権威はそういった学者的な権威ではなくして、もうひとつ別な種類の、次元の違った、質の違った権威であった。人間の魂はごまかしがきかないので、そういう権威に会いますと、魂の一番深いところに非常に強く触れるわけです。

「これはどうもかなわないな。これは本ものだ」

ということを感じるわけです。それで、「驚いた」というのは、ただ驚いたのではなくて、「本当にこれは桁ちがいなものである」

という、それに抗ひかふことのできない或るものである、といったことを彼らは感じたわけですね。魂がその前に平伏ひれふするような権威です。魂が平伏するような角度の権威というものがある。それが実は私たちを圧倒する。ただ単に圧倒するのではなくて——いや実にそれは圧倒されるんですが——圧倒されながら、しかし、それによって本当に救われていくという権威です。何か人を押さえつけて、それつきりだとか、そういう権威とは違う。我々がこの権



威にぶつかる」と、「本当にこれなるかな」と言って、その権威によって逆に力を得ていく。そういう不思議な権威です。

●御霊の権威

イエスはそういう権威をもって当たられた。イエスの前にもそのような種類の権威をもっていた人たちがあった。それは旧約の預言者たちです。旧約の預言者たちがそのような権威をもって、

「エホバ、かく言い給う。ヤーヴェーの神はかく語り給う」

と言って、ヤーヴェーの神の聖言みことばに権威をもっていた。聖書の権威は実にこの神の聖言にあるわけです。聖書がなぜ権威がある書であるかという点、この聖書に響いている神の言に即ち権威があるからです。その聖言を直接に預言者たちは受けている。正に、この聖言を預かっているところの者ですから。聖言を魂に預かって、それを語る者。即ち、聖言によって権威づけられている者です。

ところが、聖言によって権威づけられていると言いましても、今度は、聖言というものを、聖書の言葉というものをすっかり固定してしまつて、

「聖書はこう解されるべきものである」

と、聖書の聖言の取り方を決めてしまつて、

「その他の解釈の仕方は異端である」

といったような角度ですっかり限定してしまっているのがカトリックです。また、プロテスタントにおいても、かなりそういう色彩の強い教派もあるわけです。それはパウロが戒めている。

「儀文は殺し、霊は活かす」

とパウロが言ったゆえんなんです。そういうようにして、言葉をただ文字面から拳々服膺ふくよう、墨守する。そのようなことになる、それは儀文にしてしまう。聖言を儀文的にして、そしてその権威を着て、

「私たちはよく分かっている」

と言って威張っていたのが、ここに書いてあるいわゆる「学者」なんです。この場合、学者の権威というものは、そういった聖言をすっかり儀文化してしまつて、そして、非常にそれについて詳しい。その解明について正統的であると自ら限定づけてやっている権威です。

それが即ち学者的な権威であつて、

「学者の如くならず」

と言つたのは、

「学者的な権威をもつてしたのではなく」



というわけです。キリストのは、同じ聖言によっているのだけれども、同じ聖言でありながら、その聖言の取り方が違っている。パウロが言うところの「儀文は殺し、霊は活かす」という、この「霊」の方なんです。聖書の言葉と御霊、神の霊とは離すことができない。「聖言」という「聖」の字は即ち、霊的な聖でありまして、言い換えると霊言である。聖言を本当に霊言として、これを活ける言として、活文字として、活言として、活ける言葉としていつも受けとっているところには、本当の意味における権威が出てくるわけです。同じ聖言を受けとりながら、権威の種類が違ってしまいうわけです。儀文的な権威か、霊の権威か。こういうことになる。

「キリストは権威ある者の如く」

というのは、そういった霊の、御霊の権威ある者の如く語って、儀文的学者の権威の如く語ったのではない、ということになるわけです。旧約において預言者たちは正に霊言として受けとり、祭司とか教法師とかいうのは、ややもすると、その儀文のほうに非常に傾いた場合が多かったわけです。

●真理の権威

学問の世界でも本当はそうです。学問は限りなく追求して、真理に即せんとするところに、学問の権威というものがあるので、何か決まった何ものかではない。カントも言うとおり、カントは素晴らしい哲学体系をつくりましたが、その哲学体系そのものよりも、哲学する精神が大事だということに、カントが哲学を哲学している、哲学を本当の意味において活かしているゆえんがある。

音楽の世界にしても、おそらくそういうことが言えるのではないかと思います。音楽にも法則があるけれども、しかし、或る意味において、法則を創造していくような創造的な魂です。これはベートーベンにしろ、モーツァルトにしろ、シューベルトにしろ、ああいう人たちはみな靈感をもって受けとって、そして微妙な法則をそこに展開しているわけです。

真理の権威というものは、そういった活きた性格のものである。いわんや、キリストは

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言った。キリストは活ける真理である。即ち、活ける真理は、神の御霊をもっているその権威です。だから、「権威ある」というのは何の権威かというのと、権威の所在というのは、神の霊にある。御霊における権威ということははっきりするわけです。御霊における権威というものは、自分を何かと思わないんですから。神の御霊、神の御意、神の御言は、どこまでも神の側に絶対に権威を置いているわけです。即ち、神の権威です。

「権威」「エクシア」という言葉は、ドイツ語に訳しますと、「フォルマハト」「全権」という全能的な気持をもった言葉で、また「フライハイト」「自由」という気持を中にもって



います。この権威は本当は自由な権威でありまして、何か客体的に定められた何ものかというようなことではない。

それは自分がいつも、その権威を私しない。その権威を私したら、もはやその権威は本当の権威でなくなる。いつも、神の、神におけるということ。神の、あるいは、神のうちにあっての、そういう権威です。キリストはそういう非常な権威をもちながら、自分を何ものとも思っておられない。即ち、権威者自身が平伏しなんです。権威者自身が平伏しの態勢なんです。もし、権威者がこの平伏しの心をもたなかったら、それはサタンになってしまふ。自分自身が権威あるものの如くやつたら、それはサタンです。それは傍若無神、傍ら神無きが如くの状態であつて、サタンの角度になる。まことの権威は、権威の前に平伏している人が本当の権威をそこにいただいているわけです。神の子イエスが真の権威者であつたということは、彼が絶対に神の前に平伏している人であつたということです。それが「絶対矛盾の自己同一」と――西田先生の哲学的用語を借りれば――そういうことになる。絶対矛盾の自己同一という。魂の世界の真理は正にそうなんです。死が即生である。神の前に己が死んでいることが本当に生きていることである。これが絶対矛盾の自己同一ということなのです。

「イエス・キリストの死を負う。これイエス・キリストの生命の現れんためなり。」

とパウロ自身が言っているでしょ。そこに本当の生命と本当の自由がある。何ものにも囚われていない。神の権威に本当に囚われているということは、何ものにも囚われていないということ。己にも囚われていない。人にも囚われていない。神が立つて、そして、そこに平伏しているんですから。しかし、私たちにおきましては、聖書の権威、聖言の権威というものをいつもその角度から自分に受けとっていかないと、何か自分が信仰の上で少し進んで、

「霊的になった」

とか言つて権威ぶつたら、とんでもないはなしです。それはサタンの霊的傲慢というやつで、一番それがけしからんことになる。

私たちが福音書を読みまして、キリストの言葉を見ると、実に分かりやすいことを言っておられる。何も観念的なことは仰らない。誰にも、どんないわゆる学問のない人にも、よく分かる表現で具体的にものを言われる。しかし、その義には限りない味をもっている。これが不思議な神の真理を本当に自分の中に消化して、具体化しているところの人の言葉です。頭で何か論理的な構造でものを言っているのとは違う。ここにイエスの言葉の天衣無縫的な素晴らしさがあるわけです。山上の垂訓やなにかを読みまして、かなわないんです。断定的に言いながら、しかも、誰にも分かる言葉で、その内容はいかに深いか。

文学の世界でも、お伽話おとぎばなしというものは誰でもが分かる。アンデルセンとかグリムとか、



誰でもがこれ分かる。そして、幼き頃に読んでおもしろい。また、大人になって読んでおもしろい。その味は、何歳になっても変わって味あわれていく。そういうものが本当のものです。だから、文学の始めにして終りはお伽話である。メルヘンである。ケーベル先生もそういうような角度からものを言っております。

そこに権威の素朴さと、そして、その神韻縹渺たる豊かさがあるわけです。キリストの言葉は素朴にして神韻縹渺たるものです。それはいわゆる非常に学問的な難しそうなことを言っているのとは、そういった学者の権威とは質が違う。片一方は生命をもたない。片一方は儀文であって、他方は霊である。

今のマルコ伝2章10節を見ますと、

「人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に」(マルコ2:10)

とある。「罪を赦す権威」すらもキリストは持つておられる。聖言の内容的な真理ではなくして、今度は罪を赦す権威。そうなつてくると、「権威」という字には、神さまの持つておられるところの力、さっき言った全能的な力がある。そして、罪を赦すというためには、彼自身が本当に聖なる者、聖者でなければ、罪を赦す権威はもたない。

私たちも、キリストを受けると、その権威が移つてまいります。けれども、ただ一つ、罪を赦す権威、これだけは我々はいただくわけにいかない。キリストは或るところで、それすらもちよつと持つておられるけれども、これは非常に我々としては警戒すべきことであつて、人の罪を赦す権威というものはキリストだけがもっている。

●神の聖者

²³あだかもその時、彼らの礼拝堂に汚れた霊に憑かれた人間がいて、叫んで言った。²⁴ナザレのイエスさま、私たちがあなたに一体何だというのですか。

私たちをやつつけに來なされたのですか。私はあなたが誰だか知っています

よ。神の聖者です。

「私たち」というのは、「デーモーン」の複数の意味で、「ダイモニオン」という字からきている。そして、「私は」と言つて、特にその汚れた霊がその人の中で叫んでいるわけです。こういう現象は、ちよつと今は普段、そうでつくわす現象ではないけれども、今でもたまにはそういうことがある。

「自分たちとあなたと一体何の関係があるか」

というような言い方です。「関係」という言葉すらもそこにはないけれども、そういう気持ちです。

「私たちをやつつけに來なされたか。滅ぼしに來なされたか。私はあなたがどういう人だか知っている。神の聖者である」

と。「聖者」という言葉は特にイザヤ書においてはつきりと出ている言葉です。



「神は即ち聖者である。聖なるものである」

と、預言者イザヤが非常に強調したひとつの概念です。

私たちは――私は大学の最終講義で話しましたが――「霊」「魂」「心」「体」でできている。パウロがテサロニケ書で

「霊と心と体」

という、「霊・魂心・体」という三分法的な構造になっていると言いました。「魂」といつても、「霊」ですね。霊の世界が一番、人間で高次なところですよ。これが大体、非常にボケてしまつて眠っている。

「神は霊なり」

という、この霊の世界のことが、波動が、いわば霊波的なものがそこにキャッチできないわけです。だから、分からないんです。イエスという人物がそういった驚くべき霊的なひとであることが、その身内の人にも分からない。

「何か、この頃だいたい変わったことを言ったり、したりしているが」

なんてなわけだね。ナザレでキリストは

「己が故里にいられず」

というようなわけで、ナザレから出て行かれた。

「汚れた霊」は、悪しくても、とにかくこれは霊ですから、霊は霊が分かるんです。自分が悪いだけまた、善き霊を、キリストをはつきりと分かる。

「汝は神の子、キリストである」

という告白をだいたい後になって、第一番の弟子のペテロが、キリストがやがて十字架に架かる少し前の、弟子たちと一緒に散歩していたときに告白した。けれども、それよりもはるかに前に、キリストが伝道に出はじめると直ちに、そういう悪霊の方がキリストの本質が見えてきたものだから、

「あなたは聖者である。私たちを滅ぼしに来なさったか」

と、非常に恐がつて叫んだわけです。他の人には、普通の人には分からないけれども、悪霊にはキリストが善玉であることが分かる。自分は悪玉だから、こっちは不倶戴天というわけで、

「あなたにぶつかると、こっちはやられる」

というわけだ。それで叫んだ。

●神の権威

25すると、イエスは彼を叱りつけて言った「黙れ、出よ、この人から」。

非常に強い言葉です。気合からいうと、私はキリストの言葉の順序は正にこうだったと思う。日本語で「この人から出でよ」というと、これは整えた言葉になつてしまう。そう



いう瞬間で発する言葉は、一番直接な言葉が先に出てくる。「黙れ、出よ、この人から」と。日本語の訳はだいたい整っているように書いてあるが。

それはこのキリストの言葉に既に権威があるわけです。神の権威でものを言っておられる。御霊の権威でものを言っておられる。「黙れ、出よ、この人から」と。

²⁶すると、汚れた霊は彼を引きつけさせ、

「引きつけさせ」という言葉は「投げたおす」というような意味です。彼を内側から力で投げ倒してしまう。

大声で叫びながら、その人から出ていった。

大声で叫びながら、悪霊が出ていった。

「昔の人だから、こういう解釈の仕方をしただろう」

なんて、普通、今の学者は、聖書註解者は思う。それは霊界の消息が分かっていないから、そういうことを言うわけです。イエス・キリストというひとはただ形容的にものを言っている。具体的なものはつきり見て、言っておられる。想像なんかで言っていない。であるので、そういった聖書の実に率直な、素朴な権威ある叙述の前に私たちはただ――経験がなくても――「そうだ」と言う。これを受けとっていくことが即ち、本当に聖書を正しい意味において霊的に読んでいくことなんです。儀文として読んでいるのではないですよ。ただ、

「そう書いてあるから、仕方がない、そう思っておきましょう」

なんていうのではない。

「そうだろう。そういう現実だろう。とても桁違いな、ちよつと分からないけれども、

確かにそういう現実だろう」

と。これが本当の信なんです。その信の中に入っていくと、もう既に本質的に内面的にその人の魂はそういう角度にされている。そして、その消息が、何かしらんが、我々の内的現実になっていく。知らないままに、魂の生命の質が変わっていく。そういうものですよ。

どうか、皆さん、これを頭でもって、

「それは昔の人はそう思っただろうが、今に自分も何とかして、これをどう解釈し

ようか」

なんてやっているうちは、いつまでたつてもダメです。これも直ちになんです。直ちに受けとる。

●神の国は到れるなり

悪霊が大声で出ていってしまうと、その人は放心状態になる。それから、按手をするなり、祈るなりして、その人を――本当に神の霊がそこに入られて、神の霊によってその生まれつきの魂が生き返る――そういうように執成する必要があります。放っておくと、悪い霊



がまた入ってくる。空き巢ねらいたからね、この悪霊なんていうやつは。そのこともキリストは別なところで語っておられる。

マタイ伝12章28節は大事な言葉です。

「²⁸然れど我もし神の霊によりて悪鬼を逐い出さば、神の国は既に汝らに到れるなり」(マタイ12・28)

「神の霊によつて」と。キリストのこの権威は、ここでもはつきりとあるように、「黙れ、出よ」というのは、神の霊でものを言っている。神の霊言なんです。神の霊言をもつてキリストは、

「神の霊において悪鬼を追い出さば、神の国は既に汝らに到れるなり」

と言われる。悪鬼を追い出して本当にそこにキリストの生命が来れば、そこが即ち

「神の国は汝らのうちにあり」

ということ。神の支配するところ、神の霊の支配するところ、即ちこれが天国です。

我々が自覚するとしないとにかかわらず、みなこれは霊的存在なんです。「霊的に」とか何とか言いまして、みなこれは霊的存在なんです。その霊的存在が健全でないものだから、いろいろな思い煩いがあつたり、躓いたり転んだりする。いろいろな憎しみやたぶらかしや、これはみんな霊の働きですからね、霊的な。それで、この世は混沌としている。霊的なものが知識や感情やいろいろなものと錯綜して複雑な構造ではたらいっているわけです。その一番中心の霊が聖なる神の霊によつて呼吸を始めれば、そこに初めて本当の健やかさというものが、健全というものがある。楽になる。非常に氣持が楽になる。なにか刺々しくなくなる。

何か、「霊」というと、みんな妙に恐がつたり、嫌がつたりするけれども、そうじゃない。それはサタンはいかん。けれども、神さまの世界は何も恐くはない。「^{おそ}懼るるなかれ」と、キリストはしよつちゆう言っておられる。「何も恐いことはないよ」と。

「^{おそ}懼るるなかれ、心安かれ。我である」

という。本当の平安の世界です。これが何か異質な霊だと、異質な霊の力をもっている人は、その人に接すると何か不安なものを感じる。しかし、神の霊は平安の世界、また本当の喜びをもっている世界です。本当の光をもっている世界、本当の愛をもっている世界、本当の義が立つ世界です。それが神の霊の性格なんですから。

何か徳目だなんて思っているけれども、そうじゃない。これは神の霊が本当にそのような具体的な光であり、本当の喜びであり、本当の義であり、本当の愛である。それが神の霊の世界です。一般には道德の言葉であるけれども、道德的な言葉としてこれを受けとっている限りは、どうにも生命が来ない。義とか、愛とか、いろいろ言いまして、みな神の生命がその義の中に、その愛の中に、その光の中に、その喜びの中に、その平安の中に来ていなければだめです。



だから、神の霊によって悪鬼を、デイモーンを、ダイモニオンを追い出せば、そこは本
当に天国だ。悪鬼、サタンは罪の首魁だからね。即ち、言い換えると、

「神の霊によって罪の一番支配しているところの陰府的なものを追い出せば、そこ
は天国だ」

というわけです。ところが、その「我」というものがなかなかやつかないやつだ。また、我々の
社会というものは、そういう混沌たるものが支配している。悪霊がさかんに支配している。
そして、人間の世界はやれ、たぶらかしだの、人殺しだの、最後には戦争だのと、この20
世紀も2回、大戦争をやった。今でも方々でくすぶったような争いをやっている。これは
みんなサタンの霊の働きです。人殺しなんていうのは桁違いに悪いものです。人を憎し
みをもって対する者は、

「人を憎むものは即ち殺したるなり」

と、キリストは激しく言われているのは、その角度です。

人間の魂がいかにそういった天国と地獄を、いろんなものを持ちうる可能性をもつもの
であるか。また、そういった現実であるか。それに対してどこまでも、主導者が――「権威」
という言葉は「主権」という意味をもっている――神が、キリストが、御霊がわがうちに
ありて、主権を握ってくれる。そこが本当の豊かな平安の、また真理の世界です。今のマ
タイ伝の言葉にある通りです。

●権威ある新しい教

27 人々はみな驚き論じ合つて言った「これは何事だ。権威ある新しい教えだ。」

「これは何だ。権威ある新しい教えだ」と。新約聖書の「新」と同じ「コイナー」という字が使つ
てある。質的に新しいものを「コイナー」という。これは「今までしばらくなかったが、新しい」
なんていうのではない。これは本当に権威ある新しい教えであるということことです。

穢れたる霊どもにさえ彼が命じなると、彼らは言うことをきく。」

と。そういうような、霊を制するような、悪霊を制するような、驚くべき霊的な力はいま
でどんな学者にもなかった。昔、預言者たちが或る程度もっていた。けれども、キリスト
におけるその権威は、神の権威はちよつと桁が違う。荒野の試みで既に四十日四十夜断食
しながら、サタンと一騎打をなさつて、これに勝ったキリストです。これも神の御霊によ
つて勝ったので、霊を私したのではなかった。

28 こうして、イエスの噂はたちまち、かいわい到るところ全ガリラヤにゆき
わたった。

あまり桁違いなひとが出てきたものだから、たちまちこれが広まってしまったというわけ
です。

29 それから、礼拝堂を出るとすぐ彼らはヤコブとヨハネと共にシモンとア



ンデレとの家に入っていった。³⁰ところが、シモンの外姑しゆうとめが熱病で寝ていた
ので、彼らは直ちに彼女のことをイエスに告げた。³¹イエスは近づいて、彼
女の手を取って起こした。すると、熱が彼女から去った。そこで彼女は彼ら
をもてなした。

そういう素朴な書きかたをしている。日本語はなかなか読みやすく訳してありますけれども、私はむしろ、ポツポツと訳したほうが却って原文の気持が出てくると思う。

●神が化体しているひと

イエスがペテロの姑のところにつかつかへ行つて、その手をとって起こしたという。そうしたら、もう熱が去ってしまった。悪霊を追い出したり、病を直ちに癒したり、また、語れば即ち学者とは違った次元の言葉を発したり。イエスはというひとかと思う。全く、神が化体しているひとです。これが即ち、

「御言は肉となれり」 みことば

ということ。キリストという人物に言が化体かたいしている。神の言、御言というのは霊言、ということ。神の霊言がナザレのイエスにおいて完全に化体した。だから、神の現象体ですから、イエスという現象体ですから、私たちがこのイエスというひとに化体したこのキリストに、福音書を読んで本当にまざまざと接しなくてはいいかん。福音書の他のどこへ行つて、どんな世界中の本をどう読んでみたところで、神の神たることはつかめない。どんなに瞑想しても、神秘的な境地に入りましてもダメです。それはイエスというひとにぶつからなくては。イエスにおいて神を見るまでは神がわからない。はつきり言います。イエス・キリストにおいて神を見るまでは、神の神たることがわからない。

神さまというものはこういうように現象なきつた。しかも、

「イエスとは如何なるものであるか」

といって、百万巻を費やしても、それは説明することのできない何ものである。しかし、福音書はこれを告げている。福音書もお告げきらないでいるところのものである。聖者でありながら、実に人間らしき、最も人らしき人である。自然よりも自然なるものである。これが本当の自由であり、本当の権威です。

だから、この福音書に来て、本当に降参して、

「いや、これなるかな。私は人というものを捜しているが、遂にはじめて、ここに

おいて人らしき人に、本当の人にぶつかった」

と、かつて藤井武先生がそういう角度のことを言われた。その通りです。イエスという人において本当の人にぶつかる。いかなる人を――自分にももちろん失望する――どんなこの世の、友人、先生、先輩、後輩、親戚、何を見ましても、

「それで十全である」



という人はいないわけです。讃美歌の中にもそういうのがあるね。ただイエスだけは私の友だちだと言う。イエスという人にぶつかって、本当の人間に、本当のひとにぶつかる。ぶつかって見たら、それは実は神の化体である。神の化体が本当のひとである。これが本当の「神人」という。神の人というのはそういうことです。何ももつたいぶっているのではない。

そういうようなキリストです。彼は、どういような欠陥であろうと、それが霊的な欠陥であろうと、知的な欠陥であろうと、肉体的な欠陥であろうと、何であろうと、それを全部、全き世界へと、全きものへと転換せしめるところの、変質変貌させるところの原動力である。

●伝燈

私はこないだは「宗教」と言いましたけれども、宗教中の本当の宗教は福音ですが、この福音は文化の根源である。これに日本人が本当に虚心坦懐にぶつかって、展開していくならば、日本人は素晴らしい民になる。そのために我々はこういう集会を開いている。あなた方は、その一騎当千の精鋭になっていただきたいわけです。

私がこの少数の方々に語っているのは、あなた方でことは済まない。あなた方が、五人、十人、百人と展開するところのその酵素になつていただくは。そういった酵素になつて、そしてそれが周りのものを本当に化していく。周りの人たちを化していくためには、この霊的な力が、本当の霊的な権威が――権威の所在はキリストにあるが――また権威の所在が、それを受けているあなた方に来ていのでなかったならば、キリストの権威を権威とするのでなかったならば、本当の意味における存在的な伝道ということはできない。道を伝えるということはできない。

御霊という燈火^{ともしび}をもたなければ、「伝燈」はできない。燈火を伝える。これは仏教の方の言葉です。明かりを伝えて、そして、それから次へと、キャンドルサーブिस^{とも}みたい灯していくためには、自分が光っていないければ、自分の中にキリストの霊の火が燃えていなかったなら、それはいくらやつてもダメです。いくら聖書の解釈がどんなにできたってダメです。魂の世界はごまかしがきかないんだから。それ自身が本当に光ったもので、ウワツとその次の別な人に飛火していくようなものを持つていなかったら。

こういうところを読んで、皆さんは楽しくならなければダメですよ。

「ああ、なんとこれは楽しいことだなあ」

と。「キリストは素晴らしい」だけでは困る。そのキリストの素晴らしいさが、何かしらけれども、こちらの方に流れてきて、読んでいいうちに、その神の権威、キリストの権威の力が自分の中に入って来なかったら。



●救い上げる力

キリストがペテロの姑をウワツとつかんだら、そして起こしたらば、熱が下がってしまった。キリストの体から御霊の力が、その霊的な力が――癒しの根源は愛です。天的な愛がないところには力が働かない。審きの霊では働かない。救いの霊でなかったなら。相手をもちあげ、相手を救い上げるところの聖霊の深い愛です――これがはたらく。いわゆる「力」と言いましても、何かぶつ倒すような、そういう力ではない。救い上げる力です。サタンは、救い上げるわけにはいかない。そいつは撃退しなくてはならない。けれども、サタンといえども、その人がサタンのものにとらわれていても――その人自身がサタンでも何でも無い――いくらでもその人を、どんな悪玉であつても救うことができる。

そういう、救い上げるところの、相手を本当に生命の世界に入れようということです。その本願が彼の中に具体的に動いているときに力が働く。けれども、この御霊の世界は、相手がもし反抗すれば、これはダメですよ。

「そんなことがあるか」

と疑ったり、反抗していたならば、それはダメです。魂の世界は自由の世界ですから。疑ったり反抗したりしているうちは、サタンの霊がそこに働いているから。もちろん、そいつをもキリストはある時に撃退されて、それから癒しにもつていらつしゃいますけれども。それ自身が反対の霊的なものが働いているところには、キリストは、そういう働きをなさらなかった。ナザレにおいてはそういう働きをなさらなかったということがマルコ伝の別なところに書いてある。彼らは、魂が硬直してこわばったり、疑ったり、反抗している。物理の法則と霊界の法則とはちがう。物理の世界は、押せば必ず動くけれども、そこが魂の世界のちがうところです。それだったら、みんなもうノホホンでやっていれば、みんなキリストの本願から救われるかという、とっついそうはいかん。

「求めよ、さらば与えられん」

という。

「御前に本当に平伏せ。求めよ」

と。だから、真に求めている者、あるいは苦しんでいる者、あるいは本当に平伏している者、これはどしどし救われていきます。けれども、逆らったり、疑ったり、批判したりしている者は、なかなかこの福音の世界に入つて来ないことは事実が証明する。

そういうわけで、私も、もちろんそういった癒しの経験を経験を既にいくつかいただいております。按手して祈つてあげると、幼児の魂は非常にそういうところは素直に受けとる。

「私は人を癒すことができるだろうか、どうだろうか。そういった霊的な賜物がどうだろうか」

と、そんなことを考えているうちはダメです。何もいらんです。私は何ものでもない。皆さんがただキリストの前に本当に自分自身が平伏して、「主よ！」と、本当の無私の愛をも



つて癒すときには、そこにキリストは働いてくださる。誰でもその力がいただけるんです。御意の動くところは、必ず成る。

「それでは、もうそうなったら、すべての病はいやされるから、薬は要らん」

なんて、そういうことをすぐ考える或る一部の人たちがあろうですが、そんなことを私は言っているのではない。薬でもお医者さんでも医術でも何でも、善きものはいくらでも善用されてよい。けれども、本当の最後の、一番根源的な生命そのものは、これは神さまから来ます。生命そのものを本当に神から求めることを、これを忘れてはいかん。

●安息日であろうといつてもいい

³²夕暮れになり、日が沈むと人々は彼の御許に病人や悪鬼に憑かれた者を

みな連れて来た。

なぜ、「夕暮れになると」ですか。これは、ユダヤ人は安息日には何もしてはいかんと思つてゐるものだから、この場合の「夕暮れになると」というのは、

「安息日がちょうど終わると」

ということ。即ちこちらでいうと、「土曜の晩になると」ということ。しかし、それは本当はキリストのところではない。キリストは、

「安息日であろうと、何であろうと、いつでもいいよ」

と。それは別なところで言っておられる。

「安息日を破つたから、イエスというやつはけしからん」

というわけで、学者や祭司がキリストを憎んだ。それで、安息日が終わったから、みんなやつて来たわけだ。

³³すると、町中の人々がみな門口に集まった。³⁴イエスはさまざまな病気に罹つてゐる多くの病人をいやし、また多くの悪霊を逐いだした。また、悪霊どもに発言を許さなかった。彼らにはイエスが分かつていたからである。

「彼らはイエスを知つた」と書いてあるけれども、

「彼らにはイエスが分かつた」

と、むしろ訳したい。

「イエスがどういう人であるか、どういう本質であるかが分かつていた」

という気持ちで、私はそういうように訳してみた。

「彼らにはイエスが分かつていた」

というのは、イエスが神の子、聖者、救い主、メシヤということが分かつていた。即ち、悪鬼どもはイエスの本質がもう既に見えていた。けれども、イエスは

「これを表すな」

と言つて、しばらくこれを制しておられた。「神の子」と言うと、これは冒瀆者であり、或



いは「メシヤ」と言うと、これは支配的な王国をもたらす者として、今度は政治犯として捕まりますから。もちろん、イエスはやがて捕まることは知っている。しかし、それはまだその時ではない。

「我が時にあらず」

というわけで、制される。

●無権威

一応これで今日のところを読んだわけですが、しばらくまた他のところにも当たってみたいと思う。ヨハネ伝10章14節から、

「¹⁴我は善き牧者^{ひつじかい}にして、我がものを知り、我がものは我を知る、

この場合の「知る」が今の「悪鬼が知る」と同じ字です。

¹⁵父の我を知り、我の父を知るが如し、

「知る」という言葉はユダヤ人にとつては、

「本当にその本質が分かっている」

という意味の、人格的に靈的に本当にそれを受けとっているという意味で、知的に知るということではない。

我は羊のために生命を捨つ。¹⁶我には亦この檻^{おり}のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼らは我が声をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。

このへんは非常に大事な言葉ですね。

¹⁷之によりて父は我を愛し給う、それは我ふたび生命を得んために生命を捨つる故なり。¹⁸人これを我より取るにあらず、我みずから捨つるなり。我は之をすつる権あり、

この「権あり」という字がこの「エクスーシア」という字です。

復これを得る権あり、

これもそうです。

我この命令をわが父より受けたり』

キリストの生活というものは、いつも根源的には、一番究極においては、すべて「父の権威において」なさっていた。

「御意をなされたまえ」

というのがキリストの祈りです。神の意志に自分を全托している。全托しているということは、自分は何も権威をもたないということです。無権威なんです。キリストは、自分は本当は無権威です。自分で本当の神の能力^{ちから}を、権能を用いたまえば、彼らに捕まるような人ではなかった。けれども、なぜ、彼は捕まったか。それは弱いから捕まったのではない。



十字架につくことが神の意志、神意である。だから、自ら捨てる権威があった。また、これを得る権威を、復活する、生命を得る権威をもっていた。また、王の王として今、霊界に君臨しておられるところの権威をもっておられる。御霊をもつて我々の中に入ってきて、我々を支配したもうところの御霊の権威をもっておられる。これが即ち、父の命にこれ従い、父の意志にこれ従うところに権威がある。

どうか、私たちもそういう意味において、御霊において聖書を読みながら、聖書の権威が、聖書の前に常に平伏しの魂であるときに、何かしらんけれども、侵すべからざるものをいただく。そして、これは何も威張りちらすためではない。その権威、権能というものは一切のものを展開し、これを担い上げていく一番原動力となるところのものです。

●キリストの権威

マタイ伝28章18節をみます。これはマタイ伝の一番終りです。

「19 イエス進みきたり、彼らに語りて言いたもう『我は天にても地にても一切の権を与えられたり。20 然れば汝ら往きて、もろもろの国人を弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、
「名によりて」は、「名の中へとバプテスマを施し」です。

21 わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教えよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり』」(マタイ28・18～21)

「天上においても、地上においても一切の権威をもっている私が世の末までも汝らと共にある」

と。何ものをも恐れないような人にはどうしてなれるかというのと、このようなキリストの権威をうちにいただくことになると、そうなる。これが本当の平安なんです。「恐れない」ということは、何か威張るようなことではない。実に謙虚である。実に謙虚でありながら、何か侵すべからざるものがその中にドカーンとある。それが即ち、聖霊におけるところのキリストの権威です。

黙示録の12章10節から見ます。

「10 我また天に大なる声ありて『われらの神の救と能力と国と神のキリストの権威とは、今すでに来れり。我らの兄弟を訴え、夜昼われらの神の前に訴うるもの(即ちサタン)落とされたり。11 而して兄弟たちは羔羊の血と己が証の言とによりて勝ち、死に至るまで己が生命を惜まざりき。』」(黙示録12・10～11)

そういう殉教者たちの、本当のキリスト者たちにおけるところの「権威」のことがそこに出ております。

なお、エペソ書1章21節に、



「²⁰神はその大能をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦えらせ、天の所にて己の右に坐せしめ、²¹もろもろの政治・権威・能力・支配またただに此の世のみならず、来らんとする世にも称^とうる凡^{すべ}ての名の上に置き、²²万の物をその足の下に服^{したが}わせ、彼を万の物の上に首^{かしら}として教会に与え給えり。」（エペソ1・20～22）

「政治・権威・能力・支配」の「権威」という字がそれです。

ルカ伝10章18節から、

「¹⁸イエス彼らに言い給う『われ天より閃^{ひらめ}く雷光のごとくサタンの落ちしを見たり。¹⁹視よ、われ汝らに蛇・蠍^{さそり}を踏み、仇^{あだ}の凡^{おさ}ての力を抑^{おさ}うる権威を授け
たれば、汝らを害^{そこな}うもの断えてなからん。²⁰然れど霊の汝らに服するを喜ぶな、
汝らの名の天に録^{しる}されたるを喜べ』」（ルカ10・18～20）

ということは、霊が服することを喜んで、そして自分たちが何か霊的な権威をもつような
気持になつては、それは大変であるという角度から、キリストはこういう戒めを言われた
わけです。

●その秘訣は十字架

「権威ある新しい教」という、キリストの言葉がいかに権威があるかということ、今日、
方々で少し引用しながら教わったわけです。信仰はもちろん、「信仰から信仰へ」と進むも
のであつて、これでいいという世界はありません。けれども、どういう段階におきましても、
我々の側の何かによるのではなくして、御霊が本当に内住するということが、いかなる信
仰においても常に可能なことなんです。

その秘訣は十字架です。十字架において、キリストが「棄つる権威あり」と言つて、自
ら棄てられた。私たちのために完全に自分を棄てて、そして贖罪した。一番、神の権威に
逆らうものは罪ですから。神の権威に抵抗するところのものは――サタン・陰府・罪・死
という――我々に抵抗をきたらすところのものはこの罪ですから。我という罪から贖われ
ているという現実――これがサタンの権威の方にずれるわけですから――この現実か
ら私たちがぬけるということは、いかなる所、いかなる瞬間においても、絶対にこれは可
能である世界です。これだけではできる世界なんです。他のいろいろなことができなくても、
その罪から解放されているということを受けとることは、これだけは一番可能な世界なん
です。

それは何故かという、これは絶対な恩寵であるからです。絶対な恩恵の世界ですから。
これからはずされたら、十字架を本当に仰ぎ、十字架に自分が十字架されたら――キリス
トと共に十字架されるといふ、この瞬間をいつも祈りにおいて、祈り心をもつてこれを受
けとる瞬間は――電車の中であらうと、道を歩いていようと、何をしていようと、また



どういう心の状態でも、行き詰まりや、或いは混沌たる時においても、やるせないという時でも、ここに来る。一切の苦しみ悩み、何のかんのがあつても、このキリストの十字架に帰する。そうして、本当に我^{われ}という罪が、我^がという罪がはずされる。そこには、キリストの御霊が――「御霊のキリストが」と言つた方がいい――御霊のキリストが必ず来りたもう。

●御霊における権威

ちよつと瞑想してその中に入るといふ、この秘訣を学びとらなければいかん。どこでも。便所の中でもどこでも。こういう場合はダメだという瞬間はどこにもない。私たちが、空気を吸うことがいかなる瞬間においても可能であるごとく。キリストの十字架を受けとることは、いかなる瞬間においてもこれだけは可能なんです。一番可能なものが実は一番難しくされているというのはどういうことか。クリスチャンはおかしなものです、そんなのはクリスチャンではない。

私たちは無意識にこの空気を吸っているでしょ。これを受けとつたらば、何かしらんが、キリストの中に――「と共に」なんていうのでは少しまだ、まだるっこい――「の中に」ということ。

「我キリストの中に。キリストわが中に」

と、パウロがさんざん言っている世界です。ペテロもヨハネももちろん、これです。そうすると、平安と、何ものをも恐れないうところの「エクス・シア」「権威」とが湧いてくる。

「何年信じたから権威ができるか」

なんて、そんなものではない。誰でもがこの権威の中に入る。主権なんです。主こそ権者です。主権者が、主という権威がわがうちに主権をとりたもう。そして、その権威は、恐れなき世界に人を入れる。と同時に、その恐れなき世界は逆に人を救い上げ、人を歓びの世界に入れる力をもっている。権威という言葉にはもちろん、サタンに対する侵すべからざる戦闘的な面もありますけれども、この力というものが主権であるところに、私たちが霊的傲慢にしないところの、逆に権威をもつて救い上げていくところの、或る一つを中心というものを、これにおいて受けとつていくことができる。

そうすると、その為すこと言うことの中に、何かしらんけれども、次元の違ったものがその人の中からじみ出てくる。キリストがこの権威をこの場合、一体何においてまず表現されたかという、そこに病んでいるところの人を癒すという、慈悲ある愛の行為において現した。そこに支配しているサタン的なものを排除していくところの――そういった愛の行為としての権威が働いているわけです。マタイ伝8章から9章にかけても、置かけてその事実が展開しています。

だから、そこに争いがありましても、或いは憎しみがありましても、病んでいる人があ



りまして、泣いている人がありまして、深い底力をもった権威は――それは愛の性格があるから、サタンを撃退していく性格があるから、義と愛と渾然たるものがあるから――我々をとおして、あなた方を通して働きたもう。クリスチャンがこの御霊における権威をもたなかったら、いくら聖書を読んでも、いくら教会通いをしても、それはつまらんです。どうか、皆さん、そういう意味において、この底力あるその権威をうちにいただいて行く。しかし、どこまでも魂そのものは謙虚である。謙虚でなかったら、権威は出てこない。これは絶対矛盾の自己同一なんです。そういう謙虚な魂であるところに、実は神さまの本当に深い、キリストの本当に深い生命の愛が、力が働きたもう。そういうことを私たちは学んで参りました。

「集会にいろんなことで来られないでいるうちに、何か妙なことになった」

なんて、そんなことはないですよ。いつも、聖書に、その活ける権威が働いていたもうところの福音書に、その角度で聖書を儀文とせずして霊の権威あるものとして、これに接していく。

「ああ、誠に聖書なるかな」

と。私たちは聖書を、そういった活ける権威をもって我々に迫っている、我々をそういうようなものにする書であるとして、どうか受けとっていただきたい。そう思います。終わります。

